

門 4
號 4311
卷 2



愛媛面影卷二

今治

半井法橋菴撰

○越智郡 予知

和名抄曰國府在越智郡行程上十六日下八日

舊事記五卷曰茅物部大小市連公小市直等祖

同國造本紀曰小市國造者輕島豐明朝御世物部連同祖大新川命孫

子致命定賜國造 子疑乎誤

按豫章記豫陽盛衰記等所謂小市御子云者小市國造小

致命ちのめいるら歟や

愛媛面影卷二

一 吾菴藏

早稲田大學圖書館
第31.1.31
藏書

續日本紀高野卷曰神護景雲元年二月庚子伊豫國越智郡大領外正
七位下越智直飛鳥麻呂獻純二百三十足錢一千二貫授外從五位下
同六月辛巳伊豫國人白丁越智直國益授外從五位下以獻物也
司桓武卷曰延曆十年十二月甲午伊豫國越智郡人正六位上越智直廣
川等五人言廣川等七世祖紀博世小治田朝御世被遣於伊豫國博世之
孫忍人便娶越智直之女生在手在庚午年之籍不尋本源誤從母
姓自爾以來負越智直姓今廣川等幸屬皇朝開卷之運適值群品
樂生之秋請依本姓欲賜紀臣許之
三代實錄曰貞觀十三年十一月十三日乙酉伊豫國越智郡人外從五位下行直講
越智直廣峰改本居貫隸九京職

日本後紀曰延曆十八年八月癸巳伊豫國人從七位下越智直祖繼母于九京
姓氏錄曰九京神別越智直神饒速日命之後也

按豫查記豫湯盛衰記等孝靈天皇第三皇子彥狹島命伊豫郡
神崎庄下之島三島明神と祭之云々云々云々小千御子と稱す世々
此國之南々大山積神ははる今の越智氏と云者此子孫を由と載り也
越智氏の系因諸家此説を據りて古書に據りて信ずる國造
本紀姓氏錄等と考ふ俗小千御子と稱す越智國造乎致命す物部
氏風早氏の月祖大新川命の孫と云ハ饒速日命の後裔と著す廿四社
考云風早郡國津彥神社ハ饒速日命と云々是風早氏の始祖と
云ハ氏神と云々云々云々風早氏の云々物部氏越智氏等の

類聚國史 百六十五下 祥瑞部鳥 桓武卷曰延曆十年九月辛巳伊豫國獻白雀

授介從五位下高橋朝臣祖麻呂從五位上

按高橋朝臣高橋郷より出づ姓なり

○和名抄郷名

- 朝倉郷 アサクラ
- 高市郷 タケチ
- 櫻井郷 サクラ井
- 新谷郷 ニニヤ
- 拜志郷 ハヤシ
- 給理郷 タカシ
- 高橋郷 タカシ
- 鴨部郷 カモヘ
- 立花郷 タチハナ
- 日吉郷 ヒヨシ

昔此十郷より後世九拾七箇村に分れり

- 櫻井村 七百十名余
- 國分村 五百八十六名余
- 古國分村 九十八名余
- 寺河原村 五百七十八名余
- 拜志北村 六百一名余
- 今喜多村 今喜多村
- 拜志上村 千二百九十九名余
- 今上神宮徳久 今上神宮徳久
- 長澤村 五百七十八名余
- 孫兵衛作村 六十二名余

- 旦村 五百四十五名余
- 今治村 三百四十五名余
- 別宮村 六百七十七名余
- 片山村 三百七十七名余
- 高市村 六百九十九名余
- 四村 千七百八十八名余
- 高橋村 千五百五十三名余
- 朝倉上村 千六百十三名余
- 長谷村 四百五十三名余
- 鍋地村 二百九十九名余
- 登畑村 五百七十八名余
- 大濱村 二百九十九名余
- 日吉村 千九百九十九名余
- 八町村 七百七十七名余
- 中村 五百六十六名余
- 別名村 四百六十四名余
- 小鴨部村 五百五十三名余
- 同中村 千六百九十九名余
- 三及地村 百四十五名余
- 桂村 二百六十六名余
- 宮崎村 五百七十八名余
- 石井村 四百名余
- 藏敷村 二百七十七名余
- 松木村 三百七十七名余
- 徳重村 三百四十五名余
- 町谷村 六百五十三名余
- 大野村 百七十七名余
- 同下村 千五百五十三名余
- 摺木村 六十名余
- 龍岡村 七百九十九名余
- 鳥生村 千三百七十八名余
- 大新田村 三百七十七名余
- 郷村 千四百七十七名余
- 中寺村 十八名余
- 小泉村 三百五十五名余
- 八幡村 二百五十三名余
- 畑寺村 百七十七名余
- 高野村 二百九十九名余
- 興和村 百七十七名余
- 鈍川村 六百五十三名余

葛谷村 二百八十二石	御厩村 七十二石余	法界寺村 三百七十七石余	新谷村 九百七石余
吉谷村 九百三十三石余 内山島	別所村 二百六十五石余	北浦村 百九十九石余 伯方島	木浦村 百五十五石余 同上
伊方村 百甲石余 同上	叶浦村 百十石余 同上	有津村 二百三十三石余 同上	宮窪村 三百三十三石余 大島
仁江村 三百九十九石余 同上	沖友村 百四十五石余 同上	沖浦村 十四石余 同上	福田村 三百五十五石余 同上
余所國村 九十八石余 同上	早川村 三十二石余 同上	泊村 百二石余 同上	田浦村 三十五石 同上
本庄村 三百六十四石余 同上	名村 五百六十六石余 同上	八幡新田 百七石余 同上内島村	棕名村 八十七石余 同上
卧間村 十二石余 同上	津島村 百甲石余 島	弓削村 三百廿石余 島上下	佐島村 九十三石余 島
沖嶋村 百八十二石余 島	大下村 六十七石 島	岡村 九十三石余 島	正味村 八石余 大島内
瀬戸村 百四十七石余 三島	其崎村 百四十七石余 同上	井口村 八百廿石余 同上	盛村 三百三十五石余 同上
肥海村 二百五十六石余 同上	大見村 四十二石余 同上	明日村 八十三石余 同上	宮浦村 三百四石余 同上

野江村 二百七十八石余
同上

其室村 百五十五石余
同上

口總村 百五十七石余
同上

浦戸村 四十七石余
同上

宗方村 百七石余
同上

生名村 島 六十四石余

岩城村 島 六百三十三石余

總高三萬八千五百八拾四石五升九合

○國分山城墟

國府城是る興國年中殿屋刑部卿四國の天將を當城に入給へり
其後天正の頃村上掃部武吉と云人河野家十八將の一人と此城に居住
せしが天正の乱に毛利氏旗下とありて禍を免れんと云其後又福島正
則當城を取立玉給り慶長年中藤堂侯公治築城の時當城の
礎を移し給りて云山上に松樹を植是て遠境より望まば即ち

愛乃面形卷二
六、島吾倉蔵

似く因て俗に唐子山と名く四方石垣今猶存して古瓦影一
豫陽盛衰記云延元五年義貞舍弟膝屋刑部卿義助ヲ吉野殿ヨ
リ西國ノ大将ト四月廿三日今張ノ浦ニ着玉ヒテ當國越智郡國分城ニ
入玉フ

豫章記云福島左衛門大夫正則拾一万石湯月城居住後移國分城
以上十一年歿

因云近き以村民覺治七藏兄弟母孝事多々今治彦徳
賞て米苞若干賜りぬその後年饑て貧乏多し甚し七藏多
城山の麓膝屋卿の墓より一町なる東谷を掘り同開珎の古
錢百餘りを得り人々傳聞て乞未め寛永錢二百を以て一錢

換りておれよとて遂に母を養ふ事をはり是れ孝感
の致すゆゑに彼我子を生るる埋んく一釜の金を獲たり
けん唐土の郭巨も愧がぬ

按元明天皇の朝より和銅を獲りて
即年號を和銅と改む因て錢を鑄
た玉へて我國銅錢の元始よして已

刊百集
の誤なり

幾百年より知寸然れも文字磨
滅せし眞に世寤見しもの

○膝屋刑部卿墓



唐子山の西國分寺の東に當りて小高き丘上は在り墓碑の正面は
臧屋刑部卿源義助公神廟とあり傍に曆應三年辰五月十
一日卒と誌しあり

按臧屋卿ハ南朝の忠臣なり北朝の年号を用ひて興國
二年と書すゆゑなり

國分寺舊記に寛文九年七月十日法印快政發願して町野彈右衛門
政貞首藤又右衛門俊重再建せる由見らる其後江島長左衛門為
信石燈籠二基と建立し石玉垣を築く今治夜話に於て文士
寄る所の詩作數多一軸とる國分寺に藏し近世儒士佐伯惟忠
側し碑を立

臧屋卿執員

擧兵廟算

仗義速驅

桓桓雄武

可起懦夫

戰功籍甚

名與兄俱

病終南海

時予命予

此賛者益軒貝原氏八十餘而所作也余偶讀自娛集得之感
懷不能已焉因謀之於同志相與刻石以奉建于墓側云

文政己丑仲夏日

佐伯惟忠謹誌

南海治乱記曰曆應二年九月北國ノ官軍破レテ義助越前ヲ去テ吉野ノ
皇居ニ參ス同三年ニ義助四國西國ノ官兵大將軍ヲ給テ伊豫國へ下シ給
ヘハ豫州ノ官方力ヲ得テ能彈正少弼ヲ大將トシ大軍ヲ揚河野四郎通
朝ガ居城河江ニ押寄テ圍ントス河野守ルヲ得スレテ退參ス官軍大

將大館九馬助ヲ以是ヲ守シ河野ハ建武三年尊氏公西國ヲ攻麻振ケ
 大軍ヲ揚テ上洛ノ時御方人トメ攻上リ西宮ニ於テ義貞ノ軍ヲ破シ志戰ニ
 依テ伊豫守護職ニ補セシメ以來將軍方ナル故也河江城陷ルニ由テ阿波、
 大西讚岐ノ羽床縣合セテ國中ヲ催ス讚州十河十郎ニ谷八郎神内右衛門尉ヲメ
 官方ニ服セシメカ義助讚州へ攻入ントス然ル処ニ新田義助病ニカリ豫府ニ
 於テ卒去シ玉ハ官方ニ服從シタル者共燈火ヲ消シテ暗夜ヲクンカ如クシ、
 按土俗相傳、松屋卿瘡ヨリシテ没スル故ニ今世瘡ヲ疾者
 此廟ニ祈ル時ハ忽奇驗アリシ云卿在世ハ兄弟身ヲ失ク國家
 報復も遂ニ恢復の功ヲ遂ズ山野ノ没出ハ實ニ氣運
 の衰ニシテこれノ卿没ク五百年の久シキ也

乃人心の向ふ所實ニ証る可也

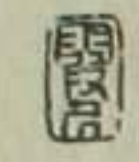
○國分寺

國分村ニ在リ真言宗本尊藥師如來行基作四國順拜五拾九番札所也
 此寺本名ハ金光明寺トシテ金明寺トモ云々ト後世金光山國分寺ト稱
 別ハ非ざる聖武天皇の御願ニ依テ天平十三年諸國ニ詔有テ國別
 ニ建立シ給ヒ一寺ヲ建ルバ國分寺トハリある也
 續日本紀曰天平十九年十一月乙卯詔曰朕以去天平十三年二月上冑ニ遍
 詔天下諸國國別令造金光明寺法華寺
 同廢帝卷曰天平宝字四年六月乙丑天平應真仁正皇太后崩太后
 仁慈志在救物創建東大寺及天下國分寺者本太后之所勸也



唐子山

羊山画



卷之二

吾



國分金光明寺

卷之二

吾

同孝謙卷曰天平勝寶八年十二月己亥伊豫國云々廿六國國別領下
灌頂幡一具道場幡四十九首緋網二條以充周忌御齋莊飭用了奴
置金光明寺永為寺物隨事出用之

同高野卷曰神護景雲元年春正月己未勅畿内七道諸國一七日間
各於國分金光明寺行吉祥天悔過之法

同聖武卷曰三千戶施入諸國國分寺以充造丈六佛像之料

續日本后紀仁明卷曰承和六年六月勅國分二寺建立自遠一則名為金
明護國寺一則名為法華滅罪寺先帝救世利物之法遠傳不朽者也
延喜式玄蕃云凡諸國國分二寺云々

按國別は金光明寺と法華寺との二箇寺を建て給ひて一國一寺と

祈王へ是を僧寺とす一滅罪の為より是を尼寺とす此二寺
と合し國分二寺といふるを國分と一國別とを同一詞を國と
し意より此寺國別は存しよるを國分寺といひしが實は寺号は
是れ國史に載て正しき古寺ありしに千歳の久しきと經に
或は兵火に燒失て今の存せるもの佛躰は鐘をくわ付各
も皆後世の物にて古寺の證とあらずある一但舊の塔の跡あり
とて田中は大礎の残りものごと當時の盛なり一世の傳はるる
らとていふべき

○塔礎

國分寺と一町を東の田中と云ふ礎石の大きき凡壹間四方と

圓柱の口は石の數十一即聖武天皇の勅命に依て造り七重塔の跡を長曾我部元親の爲に焼失せしむ然も礎のハ今猶存して千有餘年と云ふ

續日本紀聖武卷曰天平三年三月乙巳詔宜令天下諸國各敬造七重塔二區并寫金光明最勝王經妙法蓮華經各十部朕又別擬寫金字金光明最勝王經每塔各令置一部所北異聖法之盛與天地而水流擁護之恩被幽明而恒滿其造塔之寺兼爲國花必擇好處實可長久近人則不欲薰臭所及遠人則不欲勞衆歸集國司等各宜務在嚴飾兼盡清潔近感諸天庶幾臨護布告遐邇通令朕意

○法華寺

伊豫國出作村農民堀地所得鏡圖

大如圖

藏未詳

集古十種銅器之部卷三

此圖を載して因分寺と

法華寺との間に出作村

以て因て古老は尋し

は知者る猶他所は

も出作村と云ふ處に

いづれ摸寫して後人の

考とす



半山画

櫻井村西の山際に在り取玉武天皇の御頼に依り天平年中天下諸國に詔有て建立せしむ玉ひ國分二寺の二あり此寺昔ハ尼寺と云ふと云ふの頃ナカク僧寺と云ふと云ふも兵火に燒失て寺のハ残とも云ふ古の傳を續日本紀聖武卷曰天平十三年三月乙巳詔每國僧寺施封五十戸水田十町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天王護國之寺一尼其寺名為法華滅罪之寺兩寺相去宜受教戒若有齧者即須補滿其僧每月八日必應轉讀取勝王經每至月半誦戒羯林呂每月六齋日公私不得漁獵殺生國司等宜加檢校

同孝謙卷曰天平宝字二年夏六月戊戌勅為令朝廷安寧天下泰平國別奉寫金剛般若經三十卷安置國分僧寺二十卷尼寺十卷恒勸金光取勝王

經并令轉讀

同廢帝卷曰天平宝字五年六月庚申天下諸國各於國分尼寺奉造阿彌陀丈六像一軀照侍菩薩像二軀

○ 網敷天満宮

櫻井村海濱の松原に在るを志嶋と名相傳菅公太宰帥を筑紫へ下り給ひ時御船風波に漂ひて此處に着るを平漁者有り有合ふ網を敷くを扶奉りて網敷天満宮と云ふ此事豫陽盛衰記より外は考ふに本古國分村と櫻井村との境の松原をを近世又別新御社と海濱に造立せり宮殿の結構殊麗後世神社の類敷るもの多し此御社のハ古に勝るものあり

仲の恩頼は依り村民の生業も榮行故るなり

拜志所

拜志郷は在る所の一在所を加藤九馬助喜明朝臣の家老堀部主膳と
久住より共屋敷跡今猶存せし此處年貢免許状有て今も免許
地なる其文云

拜志所屋敷地子之儀差置者也

元和五年

堀部主膳

十二月十二日

在判

今治城

慶長年中藤堂侯國府城を移して築出所にして我實相院殿

美作守侍従定房公勢州長島より此城に移り居りて以来より
異姓と交ゆ守二百有餘年連綿して相續し玉り今治昔入海
馬越村の邊まで潮汐来往せしをりて築出より今治名
と云古ハ今張と書くと後今治と改む治ハ經の義より山海も便
利と得舟車朝夕輻湊して寂敏系宗の地なり
或書云慶長五庚子歲藤堂和泉守高虎公部于豫州大洲城也同
七壬寅六月十日始今治城普請同九甲辰年成就同十三戌申年和泉
守高虎所替于勢州今治城住藤堂宮内少輔寛永十二乙亥歲九
月二日宮内少輔伊賀國名張所替同年九月四日松平美作守定房
公今治拜志所看即日入城宮内少輔在城二十三年云



受後乃口シ卷二

五 西乃吾奇哉



島ノ好ノ正景卷二

四 石村権輔

按南海治乱記云河野ハ伊豫東北十郡ヲ領ス其要城ハ河江
世田湯月高外木烏帽子嶽帆柱紫尾松崎今治等也とい
凡そ然れども藤堂侯の築玉より以前今治城の在り事と聞寸
疑らハ國府城と云ふる也

大山積神社

延喜式云越智郡大山積神社名神大と云々御社ハ三島宮浦ニ立
俗云三嶋明神と云當國一宮是也二十四社考云所祭ハ三座ニして
中社大山積神上社雷神下社高雷龍也と云

古事記傳卷五云今伊豫の海中ニ大ニ島と云り大ニ島大明神の社
も云云乃二名島ハ是也と國人ハ云々信り也寸ハ越智郡大野

神社云々唱へ誤るハ何れ也

按大ニ島ハ大三島の誤也大野神社云々即大山積神社を字

摩郡にも三島云々所云々因て此嶋と大三島とい云るは是也

他國の事と論ハ鹵莽れり多し國人の説を必し信ず

日本書紀神代卷云伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智為三段其一段是為雷

神一段是為大山祇神一段是為高雷龍

釋日本紀云伊豫越智郡大山積神社俗稱三島明神伊豫國

風土記曰乎智郡御島坐神御名大山積神一名者和多志大神是神

者所顯難波高津宮御宇天皇御世此神自百濟國渡來坐而津國

御島坐云云謂御島者津國御島名也

按二名集云伊豆國加茂郡三島神社撰津國寫下郡三嶋神社伊豫國越智郡大山積神社此三所共一神也又云伊豆三島明神者移伊豫三島以祭之オモケノミコト又後太平記云伊豆國三島明神ト申ハ天神六代面足尊オモケノミコトニテ御坐推古天皇御宇瑞正三年庚戌春伊豫國迫戸浦ニ蓬萊方丈瀛州ノ三島浮ウカト明神忽現オモケノミコトト云トリ其後室龜二年乙卯自伊豫國此所ニ移レ至ヒ云ニト云ト是等の説ニ據ヒ伊豆國三島ト云ハ伊豫國ト云移奉ウカト云ト又伊豫國三島ハ撰津國元始ウカト云レ風土記ニ百濟國ト云渡来ト云ト云ハウカイソノノ一殘編ウカト云ト云ト信ウカト云ト云ト

續日本紀高野卷曰天平神護二年夏四月甲辰伊豫國越智郡大山積

神授從四位下充神戶五烟新抄格勅符大山積神五戸伊豆天平神護二年五月三日符

續日本后紀卷六曰承和四年八月戊戌伊豫國從四位下大山積神預名神

三代實錄曰貞觀二年閏十月十八日壬戌進伊豫國從四位上大山積神階加從三位

同八年閏三月七日壬子進伊豫國從三位大山積神階加正三位

同十二年八月廿八日戊申授伊豫國正三位大山積神從二位

同十七年三月壬子晦授伊豫國從二位大山積神正二位

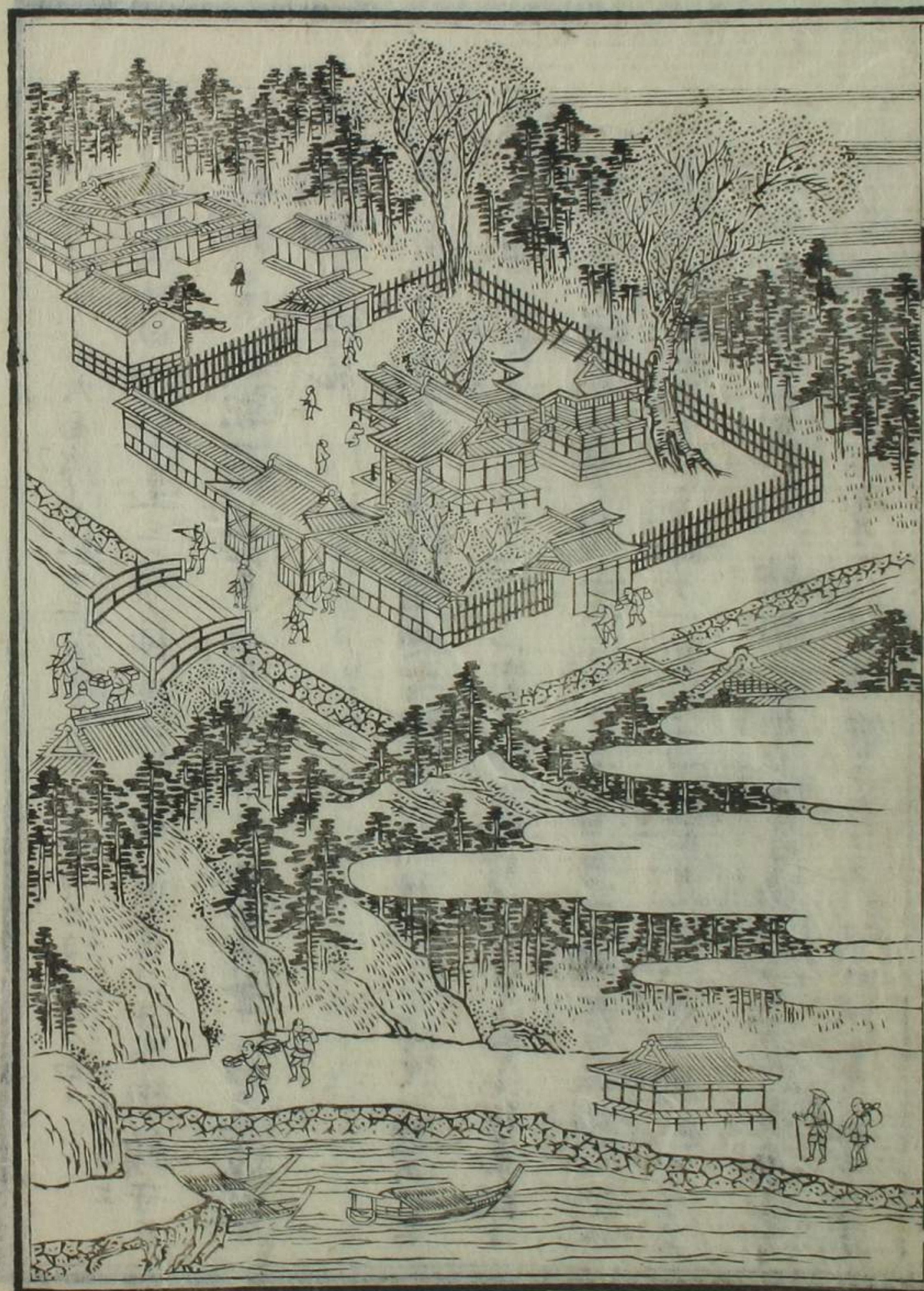
延喜式名神祭云村山神社一座大山積神社一座野間神社一座阿治美神社一座已上伊豫

大嶽山積神社



卷之二

十九日 吾人 蔵



卷之二

十九日 吾人 蔵

よる百二十年... 以前正一位を勅許せられたる... 河野軍記の正一位の文字あり

○佐理卿額

日本總鎮守大山積大明神の十一字を... 原佐理卿太宰大貳... 時風波に遇て三島に泊り玉ひ... 佐理卿覺て不思議の事... 波穩より... 大日本史佐理傳曰... 解艦一夜夢三島神來請書社榜佐理敬諾及覺風恬波穩登岸

齋戒書榜而去自是書名益著於世

按豫陽盛衰記三島縁起等... 時河野安國三島額を乞ふ... 載所比自太宰大貳... 公卿補任より正曆二年任太宰大貳叙正三位止大貳と見ゆ... 伴豫守の事あり

○寶物

三島縁起云順徳院建曆二年壬申三月廿三日火災社殿總二十二箇所焼失後堀川院貞應元年壬午正月朔日火災依テ宮殿ヲ始宝庫不殘燒失後醍醐天皇元亨二年壬戌正月十九日火災社壇ヲ始經藏ニ

至ル迄七十一箇所焼失ス漸ク残ル所尤ノ如シ

長命富貴鏡

天智帝温泉ニ行幸時明神ヲ祭至フ処ト云

鏡

一面

孝謙帝ノ寄玉ヒレ所ナリト云以上圖集古十種出

大塔宮御太刀

小松内大臣太刀長力

圖出集古十種以下多同

能登守教經弓

平重衡太刀

薙刀

一振

頼朝公ノ奉納ナリト云

鎧

一領

頼家公ノ奉納ナリト云

源義經鎧

佐藤忠信太刀

武藏坊辨慶長刀

和田義盛盛服

河野親經兜

河野通信兜

同

白旗

同

錦直垂

同

鎧袖

浅利典市服

圖出集古十種

來國光刀

二尺五寸
七百貫折紙

松山少將定英公ノ奉納

伊豫國三島社藏大塔宮所納太刀金具圖

金具皆銀

集古十種縮寫

身カタ

ハキ鉄
クスキ

ツカタ

目釘
不鉄

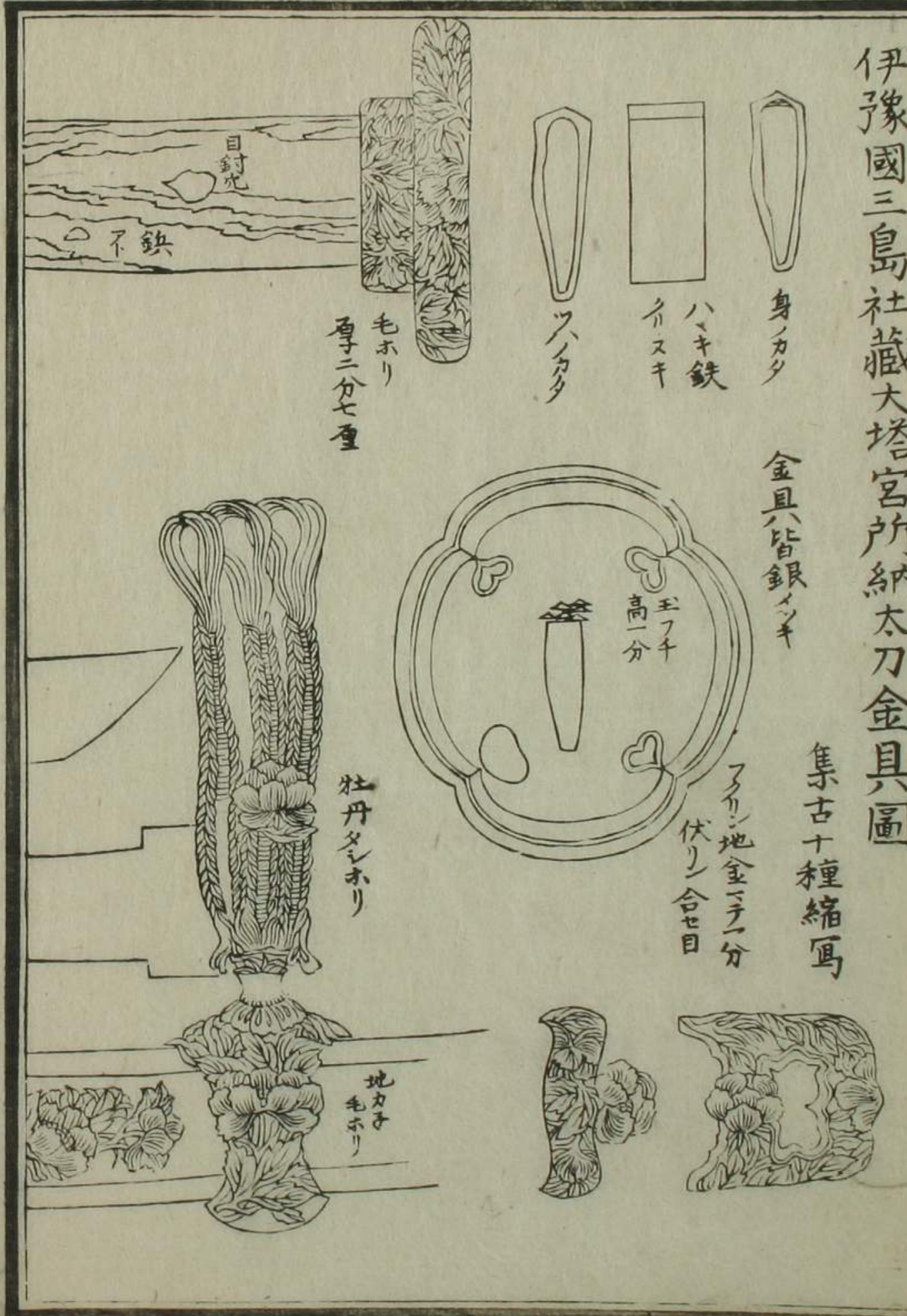
モホリ
厚ニカ七重

玉フキ
高一分

フクリ地金ニテ
伏リ合セ目

牡丹タレホリ

地カ子
モホリ



伏リ
上下ト
毛紛失

頭厚一分

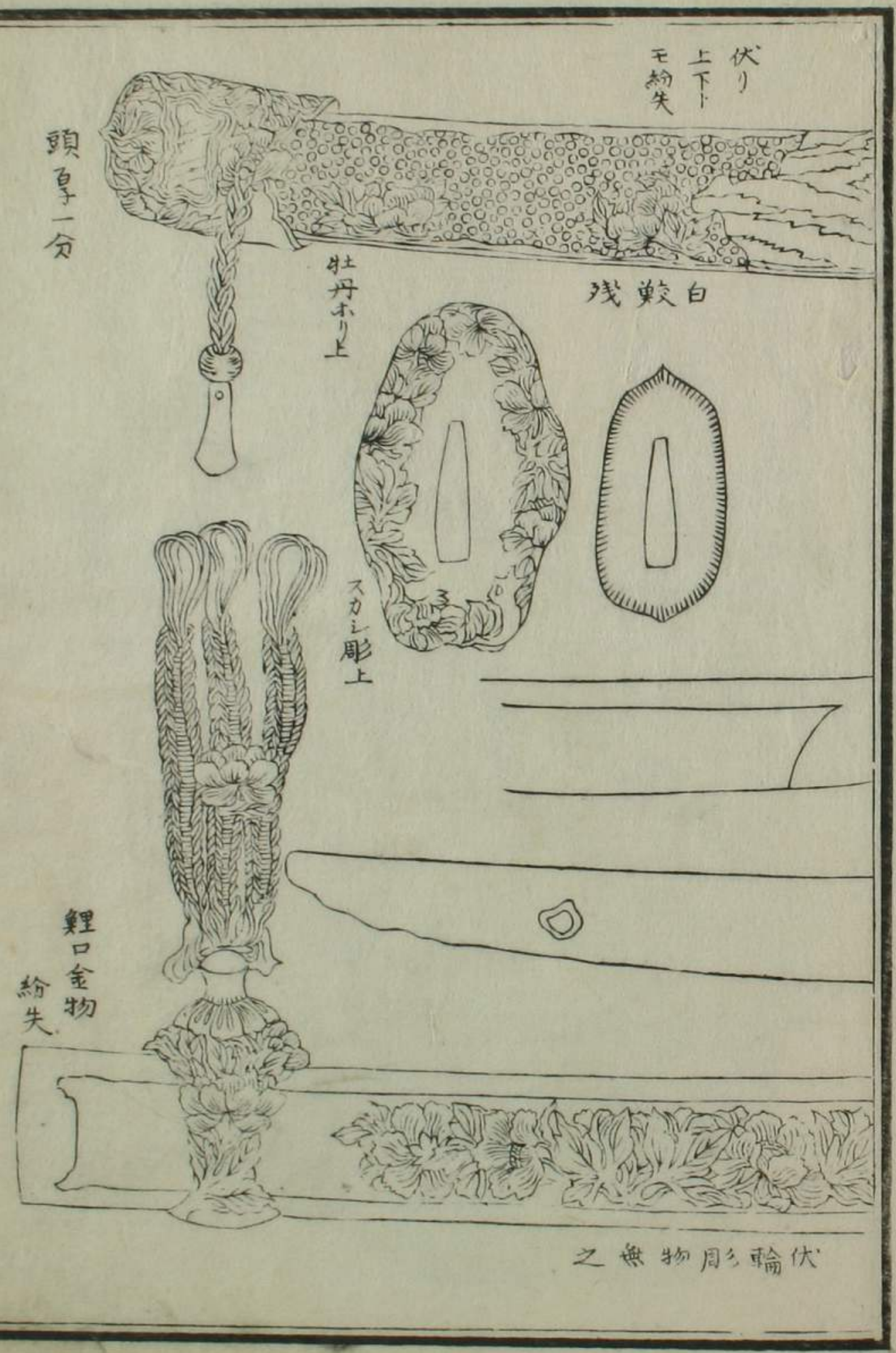
牡丹ホリ上

残較白

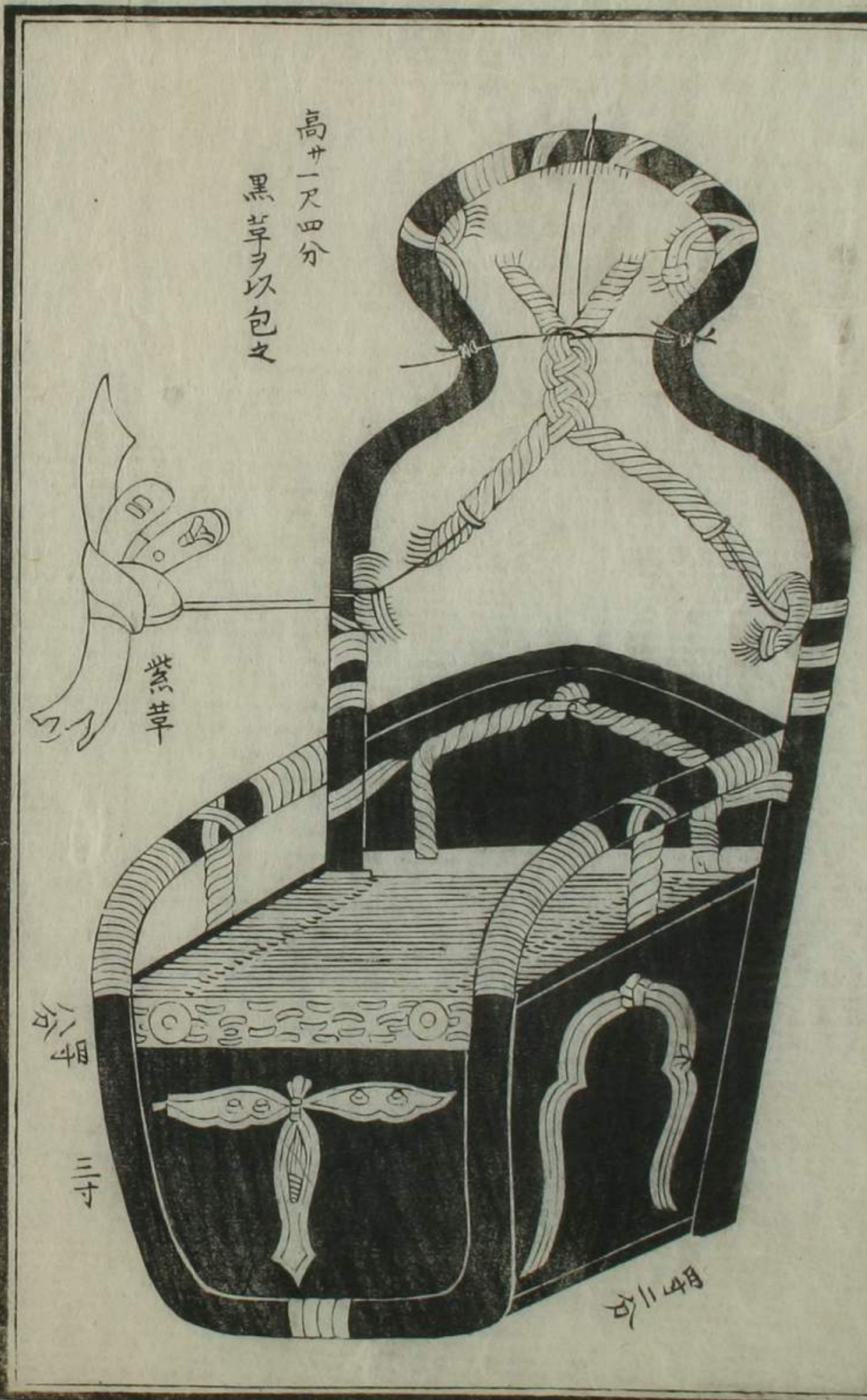
スカレ彫上

輕口金物
紛失

之無物彫輪伏



同藏和田小太郎箬圖 集古十種所載下同



高廿一尺四分

黒草ヲ以包之

紫草

四寸

三寸

四寸

以黒漆書之
白三嶋大明神

此間ノ文字皆剥落

出中子

麻糸スキ漆



麻糸損失

此末文字剥落

奉納往天一年三嶋大明神御宝殿

三浦

細麻糸損失



麻糸卷之ス漆角

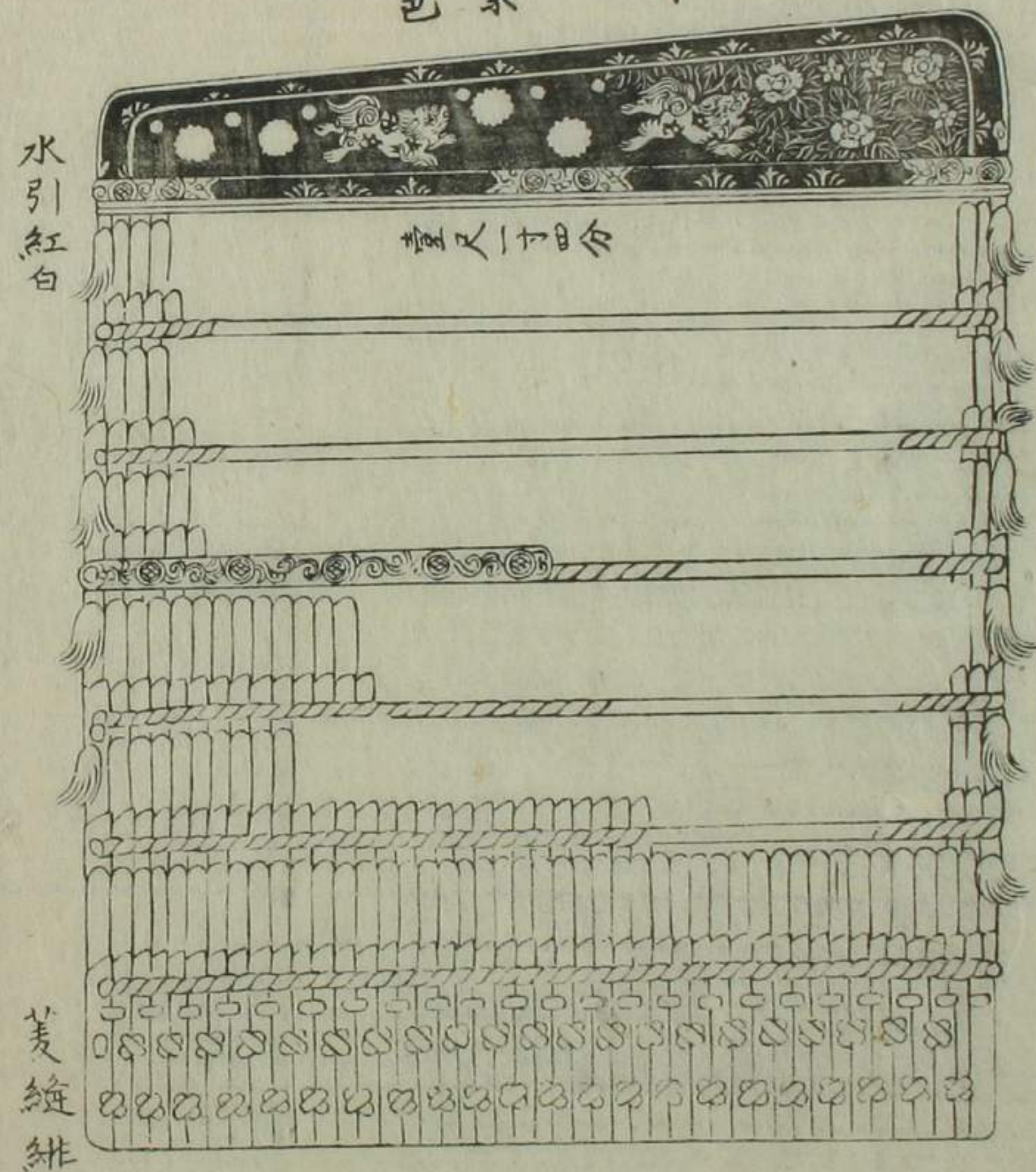
集古十種中載ル所數多其ニヲ奉ルノ

受爰乃面シ卷二

二十三 吾之卷載

同社藏河野通信鎧袖圖

緋威
 金小扎
 四目板花田糸
 ヲ以テ威ヲ
 金物總金ナキ
 包草藍地
 白文花圓紫
 伏組五色



水引紅白

壹尺十四分

菱縫緋

九文字雄刀 二尺六寸 松山少将定長公ノ奉納
 國吉太刀 二尺三寸
 義政公湯瓶 圖出集古十種
 緋紙金泥法華經 高倉院古辰筆
 同 無量壽經 同
 同 觀普賢經 同
 緋紙金泥法華經 空海筆
 同 無量壽經 同
 同 觀普賢經 同
 同 仁王經 最澄筆

受後乃口形卷二

二五 吾志成

愛媛県立歴史民俗資料館蔵

三三 翠林社蔵

同 般若心經 賴朝公筆

此外神鏡佛經甲冑弓箭箭有銘無銘太刀刀銅器等校奉了了改

○三小嶋

三島の西南に在る所の小島是る縁起云光仁天皇御宇宝龜十年勅命ニ依テ三島拱社七島中ニ宮造別テ諸山積ノ神徳ヲ俾豆國如茂郡ニ鎮座同年八月十七日三島ノ西南海辺ニ三小嶋出現ス諸人不思議ノ思ヲテ當社ニ群集ヲ為ス事夥シ是偏ニ天山積大明神ノ神徳ノ靈也ト崇メ敬フトシテ也

按ニ島ノ名ヨリテニ附會ノ事カラスニ三島風土記ニ御島ト云テ明神ノ坐島ヲ稱テテ名ルニ三ノ義ヨリテ也

因云古昔山岳ノ一夜ニ出現ト云クハ雲霧ノ晴ノや世人ノ眼ヲ始テテ事ヲ誠ニ出現スル寸ハ本朝通鑑ニ孝靈天皇二年近江國地圻湖水湛而富士山出ト云ク然レハ萬葉集赤人歌ニ天地ノ日レ一吋神ト云クハ富士ノ高根ト云クハ富士ハ元來天地開闢ノ始ヨリテ此御世ニ出ルノ事ナリト云クハ

續古今和歌集上

順德院御制

三小嶋ノ名ヨリテニ附會ノ事カラスニ三島風土記ニ御島ト云テ明神ノ坐島ヲ稱テテ名ルニ三ノ義ヨリテ也

○岩城島

三島之東弓削島の北に在る古より塩田多し名所なり

名所 夫木 洞院左衛門督

いよれ海岩城の島を我るもやまきふりうき城のいよれ

同 洞院九大臣

いよれ海岩城の島を我るもやまきふりうき城のいよれ

新撰六帖 衣の立内大臣

つもとくふさ城のいよれの島を我るもやまきふりうき城のいよれ

○誕生石

大島泊村の海濱に在り石面は胞衣のし見よる土俗相傳三島明神誕生玉ひし跡るをくすはは産婦此石よりわすれし時ハ必奇驗ありと云

島人毛利玄策村民と共に謀て碑を立おのれは碑文を請ふと書目て興々々の文曰

誕生石之碑

石在大島泊村海畔相傳三島明神所降誕之處因名之曰誕生石妊婦上蓐難分身者祈焉則往有驗云然而久埋没於沙石中人或不知之矣一日京師僧大應過之作詩以視於本莊邑人毛利玄策其詩曰神德堂三島宮至今天下仰威風可憐太古安産石埋却泊村沙土中玄策覽而嘆曰異鄉人猶知是村民豈可不省之手於是募島人以建碑請余記之銘曰

神之所降 維石如盤 婦人是禱 生産以安

濤琢砂磨 啟德無元

安政五年歲次戊午十二月 本州会治半井法橋梧菴撰

按三島縁起に推古天皇瑞正三年春明神伊豫國迫戸浦に顕る給ふ
と云ふ迫戸浦ハ大三島東南の海濱にして泊村ハ僅に海と隔る
當時胞衣のし付る石をくると云くハ云傳ふる云ハ明神箇
現身の神をハ産出する所なる此はいつれも古來相傳
て今又奇瑞ありし所のハ神徳の盛る故もハ後世流傳の神の
一時風靡すもハこの程も消去す所も成りしハ一日と
因りて流傳る寸

能島城壘

大島宮窪村の海上に在り河野氏の將村上兵部太輔と云人の城跡を能
島末島因島の三家ハ数代船軍を練磨して母軍功なり後世の兵家
船軍の事を説く者此三家に依ると云俗に三嶋流と稱する是なる也

南海治乱記云豫州海島城ニ能島ニ村上兵部太輔岸城ニ村上河内守
久苗島ニ久苗島信濃守院島ニ村上集人ニ神島ニ神修理進與居
島ニ得居播磨守等也嶋大なる居城あり嶋小なる不知其数

伊方神社

按因篤ハ今世安藝國に隸する昔ハ伊豫國越智郡に屬するなり
伯方嶋の伊方村に立せり祭る所ハ天目一箇神を祀ると云り

此處の村民ハ一眼を以て小なりと社司某もの言と

三代實錄曰伊豫國正六位上伊方神授從五位下

舊蹟考云頭書に方當作豫とあり方ハ与の誤

按天平神護二年伊豫神授從五位下とあり此時は七八十年前

るとは伊与神の誤ハ所守

○津島神社

津島の山上に立せし俗に津島大明神と名く所祭瀬織津姫

三代實錄曰仁和元年二月十日丙申授伊豫國正六位上德威神門島神宇

和津彦神並從五位下

民部帳曰越智郡門島神社或津島神田六十二束二字田觀松日古香殖

稻命御宇三年戊辰所祭瀬織津比咩也有神戶部巫戸

抑此門島神社ハ頃より分りて舊蹟考に元戸大成地

永村に所存戸嶋社是をんとして猶いふを定めて玉

井春枝が民部帳の殘闕本より見出て越智郡と語りて

津島神ハ定つて民部帳の言いし人考ふに猶德威

神の所在詳る伊方神和津彦神ハ必宇和郡に存する其外國史

見く詳るぬ神の御名を九に附録す

○墓邊神

○雄郡神

三代實錄曰元慶四年七月八日授伊豫國無位墓邊神雄郡神並

從五位下

うく正史よりそ位階授王は神の神社もさるるのこを以て神名
 といふ人のそのひるはるはいと畏き神代もや抑世の路りまふ人信
 り神くまをて皇國の神とていふ他國の神とていふのこを以て
 といふ大日貴命少彥彥命二柱の神は田作のいと放へ置置とていふ玉
 ひく國民を救ひ玉とていふ此二神ともいふとていふて唐土の神農
 といふ角有て獸をいふ神とていふて天竺の藥師といふ佛と
 といふ又ハ武甕槌神布都主神といふて武神といふ崇敬神といふて摩利
 支天といふ子の五も六も有ていふて神とていふ或ハ牛頭天王といふ頭
 角の牛の如きも彼天竺の摩訶訶院國のへいす悪て妃といふもの
 といふて嘆悲といふのいふ神といふていふていふていふて天地は

○大濱八幡宮

何とあふ八百萬の神は皆皇國の幸を守り給ふぬはるはるて他國
 の神といふていふていふの神とていふていふていふていふていふ
 心行んくといふていふて神の御名といふていふていふていふていふ
 是即皇國の幸とていふて太平の神世は報奉ていふていふていふて
 大濱村は在ていふていふ越智氏の祖小千御子といふていふていふ
 とていふハ彦狭島命の子といふていふて越智國造乎致命といふていふ
 八幡宮といふていふていふていふていふていふていふていふていふ
 八月十五日とて祭日といふて二名集といふて八月七日勝岡八幡といふ
 興三躰有るといふて一躰ハ大島棕名村といふて渡といふて仲戸の濁
 といふていふていふていふていふていふていふていふていふていふ

あれはもと今此渦と八幡渦と云

豫陽盛衰記云當國大濱八幡宮小千御子ノ靈ニテ河野ノ尊崇

他ニ異ナリ

又云小千御子ハ其本皇孫ト云ヒ明神ノ分身トモ又勲功莫大也敢テ本

武ニ劣レキヤトテ八幡宮ト称セ元則深躬ヘ宣下有云

按八幡宮ハ應神天皇ノ神号有テ小千御子ハ勲功有テ

宣下有テ是ハ其ノ盛衰記ノ以テ無訖旨ノ説多ク固信有テ

足ラズ俚諺集云或曰大宮若宮船越勝岡其外諸社祭所ノ神

八幡ハ其ノ類多ク然ルモ八幡ト号スル不審也答曰天正年中河

野ノ末ノ通生以來豊後大友義統ノ旗下トシ其頃大友ハ外宗

門多シ神社佛閣を亡ビ但八幡宮ハ武神多ク依テ除之多ク諸社八幡
の額を掛て其禍を避く當地も通生以來國中の裁断大友が下知
随ふ依てこれ如く往々舊号を歸寸も有之と云実は是れ也
此八幡もそのいもひるるなり

○伊賀山

大濱村湊山ニ在リ新田氏ノ驍將篠塚伊賀守世田城陷テ此所を船
ノ乘リ沖島ニ隠テ身ヲ終依テ此処を伊賀守ト名クシ云今ハ砲臺と
つきて大砲試ノ場所トナリ也

○篠塚伊賀守墓

今治ノ海上沖島ニ在リ一社ノ傍ニ苔むト五輪塔是也

太平記卷廿二曰人、自害シケル其中ニ彼塚伊加貝守一人ハ大手ノ二テ城
 戸残りナク押開テ只一人グ立タリ云々追懸タル敵ニ百余騎ニ六里ノ道ヲ
 被送テ其夜ノ夜半計ニ今張ノ浦ニ着タリ自此舟ニ乘テ隱岐島へ落
 ハヤト志シ船ヤルト見ル敵ノ乗捨テ水主計残レル船数多アリ是ヨ我物ヨ
 ト悦テ曹看ナカラ浪ノ上五町分リヲ游キテ船ニ岸破ト飛乗ル水主楫取オ
 トロクヲ是ハ宮方ノ落人彼塚ト云者ゾ急ギ此船ヲ出シテ我ヲ隱岐島へ送レト
 テ二十余人ノリ立ケ碇ヲ安ト引攀平五尋イケ櫓ヲ輕ト押立テ屋
 形ノ内ニ高枕シテ艤艫カキテゾ卧タリ水主梶取モ是ヲ見テアテ懐シ凡
 夫ノ態ニアラシト恐怖ノ則順風ニ帆ヲ掛テ隱岐島へ送テ後暇ヲ請テ帰
 ニル昔モ今モ勇士多シトイハレカノ事ヲ聞ズトテ條塚ヲ興置者ヲ無リケレ

按日本外史曰賊不敢追躋至今治浦見賊空船獨有舟人彼塚游而
 連之跳入船自名曰送吾於隱岐手拔錨樹桅登船屋艤睡舟人畏
 怖送至隱岐以終焉といフ太平記ニ所謂隱岐島ハ即今治の沖島
 云々外史又隱岐國と為るものハ誤也

○弓削神社

弓削島の海濱ニ在リ僧道鏡ト祭依ト云因テ俗ニ法王宮ト名ク所ノ
 風習ニ村民伊勢ニ參宮ス者ハ其妻必此社ニ通夜シテ夫ノ恙
 なく歸ル云々

續日本紀云室龜三年四月丁巳下野國言造葉師寺別當道鏡死道鏡
 俗姓弓削連河内人也云々以道鏡為太政大臣禪師居頃之崇以法王載以

鸞輿衣服飲食一擬供佛と云々孝謙帝の寵愛は誇り僭て法王
と稱ふに至る是より遂は天位は昇んと謀り多分我祖和氣清麻呂卿と
勅使して此事を宇佐八幡宮に告せ玉ひて大神殊の外奴心せ玉ひて我國
家昔よを君臣の分定むる臣とて皇位は昇り例は更なる程なり天日嗣ハ
必天皇の子孫と立よるゝ無道人ハ早く掃除せんと託宣有る由と云々の御
奏しつれば道鏡怒て清九卿と大隅國流しつれば卿の忠言は道鏡の詔王も
絶え天日嗣地は墮寸万代照く日月と光と争ひ玉ひて年々を經るも
御世も改りて光仁天皇御即位後清九卿と召せ玉ひ官位を復せ玉
ひぬ其時道鏡ハ死刑にも處せ玉ひ先帝の寵有り奉るれば造法師
寺別當と授く下野國に配流しぬ死後ハ以庶人葬りつゝ官位ハ召放せ

此事ハ日本后紀續日本紀等具載り

按此社ハおほはら河津あり必道鏡と祭り玉ひは道鏡ハ
上より如き大逆無道の奸僧に決て神より祀せ玉ひる道鏡の
姓を弓削と云ふて此島も弓削島と云ふ謬く道鏡を思ふよ
つゝ法王宮と云名を人付て祭り玉ひる先帝清九卿の勲功と
賞玉ひて嘉永四年三月十五日正位護王大明神と云神階神号と賜り時
宣命も此時汝ら下と上と凌ぎ上下と欺くはら河津と詔
給り其時我等如き卑賤身も此卿の裔なり勅命有て法橋と
賜り多程の御事也ハ此社ハ祭り玉ひる道鏡も今も朝廷
より社殿を毀せ玉ひ祀も絶え玉ひる是必の奸僧に



惣社川



高尾光賀云云一山嵐村有伊加奈志神社一名總社明神と云り此社廿
嵐の山上まきしつて此川は程近き所なり實は古の總社なるなり
又一説は鳥生橋畔有小祠号惣社明神と今治夜話に見ゆ

○別宮大山積大明神

別宮村在り和銅五年壬子五月廿五日越智王澄三島明神を越智郡日
吉郷に勧請す其後天正元年来島三郎九郎通總再建す云

豫陽盛衰記云三島供僧廿四坊内中坊兼藏坊通藏坊宝藏坊圓
光坊南光坊西光坊八坊ヲ分テ別宮大明神供僧トシ坊舎ヲ建ト云今斷
絶し南光坊の二寺の残り是四國順拜三島明神の前札所也
○巖島大明神

今治城下の市に在り神主佐伯某故有て筑前国宗像守

勸請せし社を移し舊地ハ今三九村越某の邸中ニ在り
藤堂氏築城の時今の處に移すぬせり云

○藏敷八幡宮

藏敷村に在り今治藩産土の神なり八月廿五日を祭日と守或云
河野の祖神を祀り是亦大濱八幡の類なり別當正福寺
舊地ハ城中井上某の邸中に在り

○鴨部社

藏敷村樹下と云ふ所に在り處ハ豫陽盛衰記ハ河野の祖
越智益躬と云人の霊と云云

按豫陽盛衰記云推古天皇御宇靺鞨國を鉄人と云者八千の軍兵と率て九州を攻靡て京に攻上んと寸其時越智益躬播磨国幡坂と云所を大将鉄人と擊取功よりて府中樹下を埋葬し鴨部大明神の神号を賜ふ其傍に一寺を建立して東禅寺殿と号し益躬像を比して薬師と安置せし由をいふ然れども国史は鉄人の事あり疑ふ所一播磨国風土記曰曹岡者伊與都比古與宇知賀久年豊富命相闘之時曹隨此岡故曰曹岡といり若此等と誤傳たり

○ 姫坂神社

延喜式云越智郡姫坂神社名神大といり廿四社考云所祭市杵島

姫命也といり御社曰吉村北の山邊に在りて國史云叙位の事見ずこれに延喜式云名神大といり思ふに古に大社を在ると世の降りまよ今ハハヤク御社とありて云ふといと畏し或云此社舊ハ四所とて南の田中と在りといり今ハ移りて今と按三代實錄曰仁壽元年正月庚子詔天下諸神不論有位無位叙正六位上といりハ魚位の神等も正六位上を在るべし

○ 近見山

今治城の西北石井村に在りて高き山也特之て越智野間の二郡に涉りて河野将重見氏の城蹟を山上に三島明神と祭り因て明神山と云

豫陽盛衰記曰重見因幡守通親ト明神山ノ城主河野十八將隨
 一ニテ先年京都ノ戦ニ手強ク働キ三好筑前守光長兄弟ニ腹切セタリ
 其嫡男得能志摩守通實次男重見掃部頭通昭トテ家叔身相續
 シ河野野股ノ一族也其嫡子因幡守通種次男近江守通遠三男美
 濃守通次也然レニ通種出奔以後二男通遠家名ヲ相續レ彼ノ砌通
 直ノ為ニ計レタリ通宣通直父子和乎後三男通次ヲ以家名ヲ其嫡
 重見孫七郎家ヲ相續レ明神山ノ城ニ居住メ天正十三年小早川隆景ニ
 攻メ洛サレテ命ヲ殞ルリ其二男庄五郎三男庄九郎ハ夫ヨリ沉淪シテ水ノ
 民間ニサ洛ケリ

二名集曰享祿三年三月府中石井山城主重見因幡守通村者湯

○
 月館違命事有仍村上石衛門通康家館命率二百人騎進發大戦
 城兵敗逃々籠于石井山城通康進圍彼城重見振勇猛雖防戰寄
 手日増勢城兵夜ニ逃失之間終氣盡力勞乘夜遁去防明
 僧都水

○
 日吉村の山陰ニ在リ石の井筒有テその中ニ靈泉湧出テ夏冬涸
 事有リ尤奈ク意ニ去リ石の四面ニ雲形ノ誰ノ作ナリト云
 此亦日光ノ映シテ五彩ヲ現スル楠村者曰井水ニ異ナリ

○海禪寺

日吉村ニ在リ禪宗本尊釋迦如來天竺長老ト中興開基ト守桂曰
 海深寺ト云レ後ニ海禪寺ト改メ藤堂侯より一山寄附状有

寺内は名木の塩竈櫻所り多し貞享四年二月廿八日本智院殿花
見入せむゆる時すむしゆふ

るの海は遠き山ちよふりすこゝ花のいほ

心光院殿題海禅寺詩

林其臺松樹裏山遥白雲閑臨眺堪觀世風塵總不關

○鯨山

馬越村の田中は茂り小山是る寺り安養寺と号し住古此辺
まて入江まで潮の来り時馬越りて馬越村をて入江の中
ち鯨鯢の跳かふと因て鯨山と名けり此山を掘りて今
振売多く出と云

○大須伎神社

延喜式に越智郡大須伎神社とあり所詳し或云は名命也
鏡より七神躰一寸裏に大須伎大明神の六字を彫りて云され
その後世の物より御社に高橋村の田中より多し

七社詣記の中

菅原長世

おろそかすぬるものつのは代は流たすきとまけとぬる

○伊豫熊權現社

彌熊小六郎行恒と云人紀伊國熊野に參詣せし時夢想有て伊豆國
に詣りて彌熊權現と崇む云今高橋村の山には示しは是也此行
恒ハ弥熊と氏とせり鎌倉將軍實朝公の時伊豫御家人三十六の内

弥熊三郎頼行（一）人ハ此高（二）由縁盛衰記（三）見ル其後山明（四）社（五）埋（六）其の記（七）知（八）り（九）の（十）あり（十一）我實相院殿（十二）寛文九年己酉二月七日（十三）夜の夢（十四）白衣神女来告曰我伊豫熊權現也時其至矢道正復矣又曰（十五）若見古鏡即五矢（十六）と覺（十七）て不思議（十八）の事（十九）と思（二十）せ（二十一）以（二十二）伊豫熊（二十三）の山（二十四）を採（二十五）て（二十六）中（二十七）より古鏡二面（二十八）鳥（二十九）有（三十）り及（三十一）靈劍（三十二）靈石（三十三）一箇（三十四）を獲（三十五）り石面（三十六）に經文（三十七）を周（三十八）て未（三十九）だ天承二年壬子八（四十）と誌（四十一）り天承八崇徳天皇の年号（四十二）より（四十三）寛文九年（四十四）迄九百三十八年（四十五）なる（四十六）仍（四十七）村越直禧（四十八）命（四十九）して一社（五十）と再建（五十一）せ（五十二）を（五十三）此事（五十四）將軍家（五十五）より（五十六）家綱（五十七）公御堂（五十八）行（五十九）より（六十）白銀若干（六十一）と獻納（六十二）し（六十三）ハ侍臣（六十四）關重慈（六十五）命（六十六）一東都（六十七）と疾馳（六十八）し朝前（六十九）に捧給（七十）命（七十一）と（七十二）傳（七十三）見（七十四）ル

按和漢三才圖會（一）伊豫熊野權現鳥羽院朝有神託里民勸請（二）之（三）見（四）ル（五）弥熊小六郎行恒（六）の事（七）と（八）る（九）寶物（十）は狩野探幽齋守信手痛（十一）因（十二）て祈（十三）の為（十四）奉納（十五）せ（十六）由（十七）自誌（十八）に画軸（十九）有（二十）全唐紙（二十一）は松（二十二）り（二十三）日出（二十四）鳥（二十五）の圖（二十六）其外（二十七）常信（二十八）安信（二十九）等（三十）比（三十一）奉納（三十二）ら（三十三）

○和靈社

延享三年六月（一）宇和島（二）を勸請（三）して法界寺村長淳（四）穴某（五）の庭中（六）に在（七）し諸人の信仰（八）より（九）寛政年中（十）山上（十一）一社（十二）と建立（十三）して移（十四）す（十五）あり（十六）也（十七）老若男女（十八）詣（十九）る（二十）人（二十一）昼夜（二十二）も守（二十三）神徳（二十四）盛（二十五）ら（二十六）り（二十七）し（二十八）之（二十九）一（三十）

○大野神社

延喜式（一）は越智郡大野神社（二）と（三）り（四）所（五）祭（六）廿四社（七）考（八）は（九）大己貴命（十）也（十一）

大野神社

大野神社
御社ハ大野村の山邊ニありて
大野村の山邊ニありて
大野村の山邊ニありて

大野神社
御社ハ大野村の山邊ニありて
大野村の山邊ニありて
大野村の山邊ニありて



其裏書模寫

壽永二年

八月廿日

大野神社神主

本宮宗弘謹寫

御社ハ大野村の山邊ニありて
大野村の山邊ニありて
大野村の山邊ニありて

○玉河

鉦川山より出流す此末長谷村より出く惣社川と落す

群書類従九卷神鳳鈔云伊豫國王河御厨臨時祭料土御門

前祭主御領とゆく傍に丹生川と云くを鉦川昔丹生川

と書くるるるゆ

○鹿島木林城墟

鉦川村に在る河野氏の旗越智駿河守と云人の城跡なり天正年中

小早川隆景の爲に洛城せり

豫陽盛衰記曰鹿島木林城主越智駿河守已ニ自害セント是時舎弟右

衛門尉ヲ呼テ汝ハ何ト紛レテ洛行ヘレ命ヲ全メ時節ヲ待ヘレ如何ナ

六果代ノ河野此度ニ絶果ニシ死ニハ安シ門間ガ嫡子太郎モ未タ幼稚ノ

者ナ氏心ハ同事也汝ガ爲ニモ姪ナル才覺メ連逃ヘレト云レハ右衛門尉ニ腹

シテ扱ク此輪ニ臨ニテ无様イヤルベキ族比白潔ク討死在中ニ獨生残り僅

ノ齡ヲ活シテ今ニテナキ耻ヲカケヨハ仰モ不覺跡先ヲ云エシ無益イラ承

テ黄泉ノ迷也トテ鎧ノ高紐解ケ六駿河守碯ト白眼ニテ汝ハ思外ナル愚

人カナ死テ計能ナハ我モ死ス身ノ共ニセント云ヘケ不使メ命ヲ惜ト云ニ

アス家ノ爲ヲ思フ故ナリ此大切ク他人ニ頼ムナラズ猶モ道理ヲ辨ス七生

迄ノ勘當ゾトククト云ケレハ此上ハ是非ニ及ハス今死ス全兄ヲ見捨テ泣ク

裏門ヨリ岨道ヲ傳テ或漢合迄落延云々を見

○桂山法藏寺

○桂村に在り一山櫻樹を多く植是く花の頃ハ詣る人サリ寸本尊釋
如來立像長五尺四寸俗に相傳赤梅檀とて天竺毘首羯摩作也
と云

按赤梅檀ハ即沉香木と云諺所謂梅檀ハ二葉より殼香いと云女の
是より此像有本理固沉香の類より疑わらハ京都嵯峨青
竜寺の釋迦と誤混ハ説多し今治夜話に有傳可秘と云
又伊豫俚諺集云実ハ鬼子母神の告よりとて大濱佛師唐
桑とて造之

○重茂城墟
和木村に在り岡部十郎と云人の城蹟を云

豫陽盛衰記云此度高外木落城以後隆景ヨリ和議ノ事ヲ云送ラレバ
中川計ハ承引シテ城ヲ明退新ニ秀吉公へ出テ奉公セシ也其餘ハ曾テ諾
セ命ヲ限ノ返答シテハ力不及夫々手分シテ勢ヲ差向レ其内岡部十
郎ハ其場ニ臨テ城ヲ開去トシテ

○幸門城墟
龍岡山に在り豫陽盛衰記に竜岡幸門城主正岡右近大夫ヲ始
云と見ル

○楢原山
越智郡第一の高山也東ハ鈍川に屬西ハ竜岡跨嶺上ハ藏王權現と
祀牛馬と護り守神也とて農民信仰とて詩人多し鈍川千足山

佛崎寺登山の岨道櫻の大樹多し別當光林寺昔弘範上人此山より祈雨の時奇瑞有る由人口は膾炙せり

春枝云式内伊勢國度會郡奈良波良神社の神名秘書曰又伊豫國に在り所祭伊邪那岐神也との事

今治夜話曰一年大旱赫日焦肌青田為自土令弘範祈雨於南羅波羅藏王權現築壇一七日當其六日所執之獨鉦神水滴矣忽辭壇歡喜曰請雨法中探無龍到山城國有龍魔之來于此大願成就矣因

欲修破壇法官士宜早下山勿怠恐不得涉菟川矣諸吏隨言而下山時日停午赫々然唯見東方遙天片雲耳衆或疑或哂及至菟川疾風拔樹暴雨驟至衆大驚嘆賞

光林寺

光林寺

畑寺村に在り真言宗領主代々の祈禱處なる也

豫陽盛衰記曰來島數代の家老原四郎兵衛ト云者忠ハ不顧私勇ハ不惜命トイハ二トモニ全セリ男子一人有レカ跛テ其後大島ニ居年ヲ經テ尙

家ノ縁ニ入テ男女二人有男子ハ出家シテ俊良光妙靴上人ト云リ越智郡光林寺ニ住シ德義アル僧ノ由其頃沙汰セリ今治夜話作弘範

作禮山仙遊寺

別所村山上に在り真言宗四國順拜五拾七番札所也本尊千手觀音何人の作るものぞ知ず縁起は龍女一刀三禮作るといふこと信ずるよし然れども其基尤古一本堂度々災よるといふ今存せる者

我實相院殿の建立せし終五ノ所なるを云此山上は天智天皇陵と
云者所も固附會の妄説を此寺は足利家の寄附状有其外河
野家数代の文書并正岡左衛門大夫得能下總守等寄附状多し

仙遊寺住持職之事や合は也

右任先親の名を退領書て全寺務に状如件

三十一
仙遊寺
三十一

○犬塚池

作禮山の麓に在る堤下は犬塚有因て名くと云此池谷山の水を漕
て夏冬潤ふ事一越智郡の田面より河の惣社川を第一とす
此池水亞之と云相傳昔義大は仙遊寺と八幡山榮福寺と西
寺は愛せし仙遊寺の鐘鳴時佐礼山は来り榮福寺の鐘鳴時ハ
幡山は登系或時西寺の鐘一時は鳴くは南北は狂走り遂は此堤下
斃て死より仍て此処は塚を築く大塚是るは俚諺集は榮
福寺を三嶋別宮と作は

○石清水八幡宮

八幡村の山上に立せる此山の形勢惣社川の南に特立て山城の男山

甚相似し因て此山も八幡山と名く何項の勸請ありしと知す

江戸名所圖會鈴鹿八幡宮社記云清和天皇貞觀年間八幡宮宇佐宮

より山城国石清水に鎮座在時六十余州国毎に總社八幡宮と擇定給

へりし云別當榮福寺真言宗四国順拜五十八番札處なり

○伊加祭志神社

延喜式に越智郡伊加祭志神社とあり是祭所詳なり或云五行

神也御社八幡村の内五十嵐村の山上に立せり

神主高尾光賀曰此社昔より總社明神と云傳はると

按古國府に必總社なり國司神拜の所とせり總社多々一宮に

合祀せりと當國の一宮に海上を隔て此社に合祀せりと云

○淨寂寺

四村の内松尾に之所の山際在り禪宗に昔八能寂寺と云ると後

に今名に改り足利家の文書河野氏数代の寄附狀等今猶存せ

り觀應貞治延文正平等の年号見ゆ中は制札の文あり

林示制

能寂寺

右於當寺甲乙人不可致乱妨狼藉若北月此上首輩者可被

罪科之狀如件

永徳二年

十月十六日

右馬頭

本國院殿每此寺又立寄せ玉ひ隨轉和尚と贈答せり給ひ
詩教首何の中よ

重邊淨寂禪林和隨轉道人所呈一律

騰月迎春早好風及四葉棠閣清心易足山遠眼難量又手
唵 獲 句 揮 毫 裁 數 行 禪 心 磨 不 磷 一 喝 貫 天 霜

采女今題

今治夜話云享保十七年三月十七日隨轉和尚行年七十九歲而入定家
上儲竹筒故所持之梵鈴鈴微音希徹數十日群參諸人所聞之也
遺偈并歌

大千世界中一箇一團鉄慈釋二尊間都不預生滅

生れくハ死す日まて此命をくぢひぬる夜の憂ハあめり

鷹取城壘

作礼山の南新谷村の山上に在る礎石垣等今猶存也

豫陽盛衰記曰古谷鷹取山城主正岡紀伊守入道八近來河野ノ命ニ
違ヒ己ニ軍ニ及フ事度也也見る見より新谷村吉祥寺の後の峰に小祠有

正岡紀州の靈と祀る云

多伎神社

延喜式に越智郡多伎神社名神大とありて所祭詳くは或云素戔
鳴命也又一説に大己貴命女多伎比賣也と云り御社古谷村の山の
麓に立せり俗に瀧宮と云

三代實錄曰貞觀二年壬子閏十月十七日癸亥授伊豫國從五位上瀧神從四位下

同八年丙戌閏三月七日壬子授伊豫國從四位下瀧神從四位上

同九年丁亥二月五日丁亥授伊豫國從四位上瀧神正四位下

同十二年八月辛巳廿八日戊申云授伊豫國正四位下龍神並正四位上

完戸大成云龍神ハ瀧神の誤るべし

一年早しき時野政瀧神社ニ奉りたる祈雨の歌

名よりかり四方の田面のうもあまをせけしを瀧のや海

神感りく瑞雨りくるといひ傳へり

川上巖

滝神社十町を過り奥なる山上に在り早す時此巖と薫じハ必雨と
依く俗は薫山石と云ふなり松長廿ぬと越智郡七社詣る時
の道記の中に此巖の事と誌しとハ後ハ登り人のみかたて
いづ書くべし

古谷村なる多伎神社ハ奥山麓をそそぐ層々として一とせしむる
川に流るる瀧川の末に流るる瀧

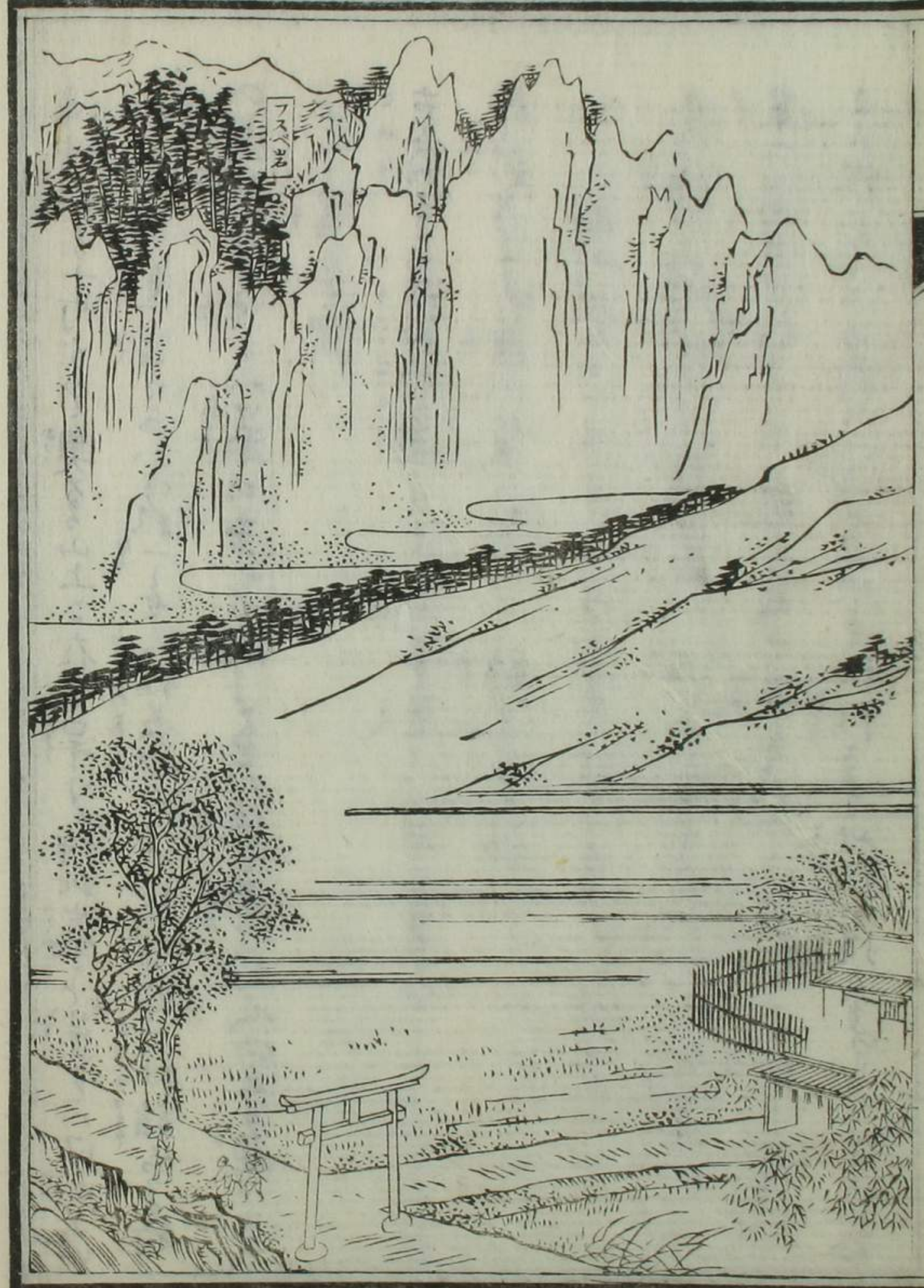
山川れりてあまをさすあまをさすらん瀧のみや
おの流るる瀧の心は石のちかき此傳は社司津部何
某の家あり後者此瀧をさして茶を飲出二町を流るる瀧川
又在標りてこの瀧と流るるやそ御社なる此社ハ珠玉のびと社司

多岐伎神社



急峻乃面山卷二

四十八 白口吾屯威



好乃面景卷二

四十七 石村面莊

とておよはるる昔は真人を葬り一墓を造り大小凡四五十年をも
つと云猶此塚穴の考り久米郡を播磨塚の処といつて

○靈山城墟

宮崎村に在り中川山城守親武金常陸介豊住の人の城跡なり今
治圓光寺の中川の菩提寺にて親武の画像あり云

豫陽盛衰記曰船にて人数ヲ操出シテ不意ヲ討ハ中川山城守也ト早、
シテ櫻井ノ濱へ上リ意趣ヲ認メ一通ヲ送り否ヤ彼城ニ押寄タリ此城守

親武ハ河野十八将ノ一人ニシテ越智郡朝倉宮崎靈山城主也此頃野心
有トハ知ナカラ今テカク寄ヘキト思モ寄ラステ城中上ヲ下ト返シケル

宮崎靈山城主中川常陸介等ノ面ニ嫡流自立ナキヲ恨テ別儀ヲ立終ニ催

促ニ應セズ今度高外木落城以後隆景ヨリ和議ノヲ云送リシカハ中川計承
引シテ城ヲ明退キ新ニ秀吉公へ出テ奉公セシ也

○樟本神社

延喜式ニ越智郡樟本神社ト云テ所祭素戔鳴命也ト云御社ハ
町村の田中ニ立セラル

三代實録曰貞觀十七年乙未夏四月九日丁巳授伊豫國從五位下楠
本神從五位上今本作楠木誤也

類聚國史神祇部十六曰貞觀十七年四月五日丁巳授伊豫國從五位
下楠本神從五位上

大成云今の神名帳ニ樟トニキト訓ハ非ズクスト訓有るハ

三代實錄に楠とありをみよ
矢野玄道曰神名帳古本ハクスと魚とせり三代實錄も古本ハ樟本と書ゆ樟新撰字鏡久須乃木と見え和名抄楠久須乃木櫟樟日本紀讀上全とありをも久須とむきり明る

○矢野八幡宮

朝倉中村に在り越智氏の祖天狹貫の靈と祭ゆ因て朝倉郷の宗廟と稱せり

伊豫不動大系圖云朝倉宗廟ハ人皇七代孝靈天皇第三皇子彦狹島王三代小千天狹貫ノ廟也

按此社も大濱八幡宮の類なり

○野間郡 乃萬

國造本紀曰怒麻國造者神功皇后御代阿岐國造同祖飽速王命三世孫若彌尾命定賜國造

舊事紀五卷曰物部金連公野間連借馬連等祖目大連之子

伊豫風土記曰野間郡熊野峯所名熊野者昔熊野止云船設此至今石成在因謂熊野本也

按今世野間郡熊野と云は乃萬の事也風土記殘篇より所怪き事多し悉く信ぜり

○和名抄郷名

宅万郷 英多郷 大井郷 賞多郷
 神戸郷

昔此五郷多しと後世二十九村に分つた

- 阿方村 千七百九十九内山路 矢田
- 延喜村 五百八十八
- 神宮村 四百三十三
- 野間村 四百三十三
- 紺原村 六百七十九
- 大井濱村 五百七十九
- 宅万村 七百六十九
- 九王村 四百五十九
- 樋口村 六百六十九
- 松田村 三百零九
- 高部村 三百零九
- 宮崎村 三百零九
- 波方村 千三百三十三内小部 波止
- 宮腰村 七百三十三
- 山内村 五百六十九
- 腋村 六百六十九
- 星浦村 三百三十三
- 别府村 四百九十九
- 佐方村 六百六十九
- 種子村 七百六十九
- 池原村 五百七十九
- 松尾村 三百三十三
- 河内村 五百七十九
- 中川村 四百七十九
- 高田村 三百三十三
- 長坂村 五百三十三
- 濱村 四百三十三
- 西山村 三百三十三

來島 廿六名余
 内小嶋
 新町村 二百八十八

總高壹萬四千九百八拾九石二斗二升五合

○野間神社

延喜式に野間郡野間神社名神大とありぬる所ハ廿四社考に天
 照坐大神和靈神也といふ御社ハ神宮村に立サる俗に牛頭天王と
 といハ誤也と大成云天皇神といふは某天皇と祭奉るといふ
 續日本紀高野卷曰天平神護二年夏四月甲辰云野間郡野間
 神兵授從五位下神戸各二烟 新抄拾勅野間神六戸伊予國
 續日本後紀曰承和四年八月戊戌云伊豫國從五位下野間神并預

名神

三代實錄曰貞觀三年五月廿一日甲午云授伊豫國從五位上野間神從四位下

同八年閏三月七日壬子伊豫國從四位上野間天皇神云授正四位下

同十二年八月戊申授伊豫國正四位下野間神正四位上

同元慶五年閏月廿八日壬寅授伊豫國正四位上野間天皇神從三位

長寬勘文天慶三年二月一日丁酉伊豫國野間神正位去承平五年依海賊支被祈申十二社

按天皇と云ふは俗に牛頭天王也と云ふなり一は牛頭

天王といふは安部晴明が著せる金鳥玉兔集之中天竺摩訶陀

○

國云改号牛頭天王頭戴黃牛面兩角尖猶如夜叉又厥勢長大由膳那也厥相顏異他故更固有后宮四姓皆悲嘆云云何とて天竺摩訶陀國人也蘇民將來と云ふ羽の船を借て龜王城に至り頗梨采女と嫁て八將神を生りて怪しき神とていとくも我日本の神の所存はあつてつらハハのこれの証事とや或ハ素戔嗚命と牛頭天王也といふハ殊にそれる

○ 圓明寺

阿方村に在り真言宗本尊不動行基作ると云四國順拜五十四番

扎所

○ 延喜觀音

延喜村乘禪寺に在る靈佛を祈むハ奇驗ありて老若男女詣り人多し

俚諺集云松山少將定直公初今治城に在り時ハ此觀音と信じ玉ひ
一ハ松山の養君と成玉一ハ後近村石手の田中ハ一寺と建立して此觀
音と安置しむり然るに延喜村に遷るべき靈臺多度ありてハ遂に
本の處に返すを給い其時の堂宇今の本堂是なり

按玉銓百首に釋迦孔子も神なりと云ふは云々ハ佛も固り神
るれば祈るに驗ありと云ふは云々ハ國の神と云ふハ外玉の
神を祭るに云ハ我親を味して他人の親を敬ぶ如し

○ 波止濱

波方村に在り頗廣大なる入海あり東に久島有て三面ハ山陰多しハ箱
の中の如しハ風波も障有る事あり因て數百の大船此濱に停り
風景殊に宜し波方昔ハ宮瀉と云ふ此干瀉の箱の如くも依て
名を負り此所塩田多し天和の頃經營とありて云樋口川の堤長
六百三十九歩松田川六百十一歩南高部村の境と經て河水と道寸海
に入塩田の害を避く沙苗の勸請とて竜神祠ありて毎年三月八九
日の寫祭礼賑ハ民家漸く敏系榮り今に二百餘年鹵鹽の
利甚多しと云

○ 圓藏寺

波方村波止濱に在る禪宗黃蘗流の和氣郡千秋寺末

波止濱



愛媛乃面影卷二

五十六 白鳥吾龜成



愛媛乃面影卷二

五十七 石井補藏

○来島
るり云海岸に倚り構へる樓閣異域の風と寫して風流他は異り

波止濱の東五町を沖中よ在る海岸に石垣と築環く自然
の一城廓を村上の一族来島三郎九郎通總と云人の城墟を
豫陽盛衰記曰海岸に巖を要害ヲ構テ船軍ヲ第一トスハ村上来島
因嶋が其術ニ練麻名シテ張本也故也依去海陸共ニ嫡家ノ赴テ所從
ハサハ無カリキ

又曰来島三郎九郎通總ハ晴通塔トシテ風早郡ヲ化粧田トシテ贈
ラレニ代々嫡家河野ノ婿ナレハ同家ノ能島因島モ此人ヲ指シテ今ハ
三家ノ隨一ニテ領知モ多ク所々此名要害モ数多有テ勢本ニ十倍ナリ

是偏河野の因深ナ故ナリ

又曰天正年中豫州討手ノ大将九衛門佐隆景ニ命ス其頃ハ来島
又三郎未タ十八歳ニテ兼ラ又通總秀乃吉公へ士心ヲ通セシ故竊播州
姫路ニ至リ秀乃吉公ニ謁シ豫州征伐ノ先登ラ承ル其後天下一統以
後又三郎任出雲守文祿元年二月朝鮮征伐ノ時船手ノ先陣シテ
討死セリ子息助兵衛後右衛門佐康親ト号ス慶長五年ニ豊後
國玖珠へ所拜日其子丹後守通春其子信濃守通清トテ代々不相
替相續スト云

○来嶋灘
此間満干の汐を引くて風を起し波逆立渦まじりて鳴音雷の如

一沙盛ハ大船ハ怕おそとる人ト云向むかひの浦うらヲ干瀉浦いせのうらト名なくらしもも
名なはるら古奇ふるきト

来崎きたさきヲ新あらたしめしてハ夕ゆふ夕ゆふれ干瀉いせの浦うらの海うみ人の柳やなぎト云

○宮瀉

和爾雅和漢三才圖會歌枕秋寐覺等わにらげわかんさんさいずゑうたきあきみあき等らト名な所ところ多おほ今いま波なみ
方かたト云名寄歌

宮瀉みやせのなままきてまつつ君きみややハ二ふたままハ夕ゆふ夕ゆふららややト云

初はつ夕ゆふハ海うみ人のなままいいままららててト云ト云ぬぬ小梯こはしのなままハ浦うら

按今の波止なみどまりト云所入海ところいりうみト云ト云福ふくの如ごとくごとくくト云干瀉いせト云ハ此こゝははト云
るるト云名寄なよのなままいいままららててト云ト云碓うしト云けけト云又碓うしト云ト云ト云

の二ふたハ分わかららずト云二ふたままハ夕ゆふ夕ゆふト云二名集ふたなまト云西行法師さいぎやうほふしの哥うたト云

山家集やまけしふト云見みす

○宮崎

波方村北なまかたむらひのきたの尾崎おしざきト云大隅おほぐもト云大隅おほぐもの西にしト云當あたりりト云海うみ中なかつト云ト云出いる

ト云宮崎みやざきト云此こゝのなままららててト云宮崎みやざき洋やうト云名なくらト云京きやうより筑紫つくしト云通とほ

ト云船路ふねぢの難所なんじよト云昔むかしト云海賊うみぞく多おほト云此こゝ洋やう中なかつト云集あはへへト云

大成云三島明神さんしまあきかみのなまま浦うらト云宮浦みやうらト云ト云三島さんしまト云向むかひひト云ト云依より

宮崎みやざきト云ト云

三代實録曰貞觀九年十一月十日乙巳下知撰津和泉山陽南海道
等諸國曰如聞近來伊豫國宮崎村海賊群居掠奪尤切公和

行為之隔絶

按扶桑略記云承平六年南海道賊船千餘艘浮於海上強取官物殺害人命是純友の事と云ふる公其後又能島來島因嶋の軍兵諸國を掠奪し明國の境を侵すつら世は海賊と稱す海賊の名その来久く云へ

○怪島

別府村の海中に在り河野氏の將神野丸馬允と云ふの城壘を天正年中小早川の為に亡ぬ小松守野某の家は小早川氏の感状有今度野守郡怪島城合戦に刺首五被討取に被太刀疵槍疵二ヶ所忠節神妙也弥可勵戰功者也仍而狀如件

七月十三日

隆景花押
守野右馬之允及

○津尾崎

万葉拾穗抄歌枕秋寐覺等は伊豫國名所とせし和爾雅三才圖會比自同仙傳抄は野間郡と云ふ然れども其處詳るべ

萬葉集卷三

葦邊波鶴之哭鳴而湖風寒吹良武津守能崎羽毛

按代匠記云和名抄を見るに近江國淺井郡に都守郷有湖風とみみくせと訓ふ此所の事と云ふ然るに風早郡の海上に津和野島あり津和津尾音通ハ仙覺が此所の事

松尾瀧
伊豫國八定

るやと思ひ語りて伊豫國八定よりるべし

○松尾瀧

松尾村の山中に在る断崖絶壁にして寒水倒し落るる五丈
より九右松杉生茂りて昼猶暗く滝の傍る石上は観音の
石佛を安置せり風景殊よすなり是と滝見の観音と名く
近世太守定直公建立せり給ひし由俚諺集に見る

媛面影卷二終

